鉄の歴史 5

大地に刻まれた製鉄・鍛冶神の偶像

山内登貴夫　映像ジャーナリスト
Tokio Yamanouchi

Images of the Gods for Iron and Steel Making

1 『出雲国風土記』に記された山陰の古代鉄製産

日本列島には、古墳時代からの製鉄・鍛冶遺跡がいたるところに分布しており、特に西日本には、古代・中世・近世と、日本の「たたら」という伝統的な製鉄技術の革新を物語る産業遺構が数多く集中している。野だたらと呼ばれていた原初的な溶鉱炉が、真砂（まさ）土と粘土を混合した比較的進歩した耐火粘土の製鉄炉に変革されたのは、文永年間（1264-75)の吉田村の菅谷であったとされている。現在、国が重要有形民俗文化財に指定しているわが国唯一の製鉄施設である「菅谷高殿（すがやたたら)」は、鉄山を経営する田部家の子孫が、天和元年(1681)に製鉄業を本格的なものにした歴史上の遺構と伝えられ、隆盛期における和鋼の生産量は、年間8万5千貫（約320トン)と永代鑪としては中国地方第1級の規模を誇っていた。

奈良時代、733年に編纂された『出雲国風土記』は、「飯石郡合せて郷七」と記し、熊谷郷・三屋郷・飯石郡・多祢郷・須佐郷・波多郷・来島郷の七郷をあげている。また「飯石小川。源は、郡家の正東一十二里なる佐久礼山より出で、北に流れて三屋川に入る。鐵有り。」、「波多小川。源は郡家の西南二十四里なる志許斐山より出で、北に流れて須佐川に入る。鐵有り。」とも記され、仁多郡の条には、「諸の郷より出す所の鐵、堅くして尤も雑具を造るに堪ふ。」と著わしている。

飯石郡と隣接する石見の瑞穂町今佐山遺跡からは、6世紀後半の日本最古に類する製鉄炉の遺構が1989年に発見された。(図1) 最近では、島根県頓原町門遺跡から奈良時代の製鉄・鍛冶をおこなった工人たちの住居跡や、製鉄炉・鍛冶炉などの遺構が島根県埋蔵文化センターによって発掘され、一帯が古代の製鉄・鍛冶集団の村として計画的につくられていたことが裏付けられた。また、島根県仁多町高田芝原遺跡からは、平安、鎌倉期の鍛冶炉2基の跡と、その周辺からは祭祀用陶製馬、墨書土器など古代から中世にかけての須恵器、土師器が1000点以上も混じりあって発掘され、門遺跡、芝原遺跡ともにこの地方が『出雲国風土記』の時代から鉄生産をしていたことを考古学的に証明している。

図1　古代製鉄炉の遺構（島根県邑智郡瑞穂町今佐屋山）

日本海に面した奥出雲を中心とした各地では、昭和の初期まで古典的な「たたら製鉄」の操業が実際にみられた。製鉄という先端技術でおおわれた現代社会のなかにも、思わぬところにその形成過程の古代が息づいている。製鉄・鍛冶の技術神として、工人たちが信仰する「金屋子神（かなやごしん)」は、神話の伝承のなかでは、原初、大地の農作物を旱魃から救うために天空から降臨した。雨を降らせて五穀を稔らせた後、「時に鉄無くして何れの道も納まること叶わず」(『鉄山必要記事・金屋子神祭文』) と、自らが製鉄の技師長となって鉄造りを始めたという構造になっている。

製鉄を行なうたたらの施設の建設には、多くの神々が参加している。必要とするさまざまな道具を造る神もいれば、大地を動かす土木の神もいた。原材料を供給する山の神々、火・水・風などを管理する気象の神々など、それぞれの職能を分担して工人たちの鉄造りに協力した。日本製鉄史を構成する伝統的な製鉄技能集団の生活は、このように古代から工人たちに技術を教え、災害から工人たちの生命を守護する多くの神々によって支えられてきた。

現在、西日本各地に伝承されている金屋子神に対する神話や民間信仰の習俗は、東北地方から関東・東海・中部・近畿・山陽地方とと色濃く分布している鍛冶神・三宝荒神信仰同様に、製鉄技能集団の民族の移行・伝播の経緯を示唆している。また、工人の深層にひそむ技術神への畏敬、

農神と鍛冶神共存の時代から銅・鉄など金属精錬・加工にいたる技術の神として独立のプロセスを物語っている。

この小論は、「The First International Congress on Science and Technology of Iron-making (ICSTI 1994)」において発表の機会が与えられた際の草稿に、その後の調査の結果を加えたものであり、山陰奥出雲地方の製鉄集団が信仰する金屋子神を中心に書いたものである。また、制作中の記録映像台本、小著『大地に刻まれた製鉄・鍛冶神の足跡』から一部抜粋したものである。

2 鉄生産の風土のなかの金屋子神常住の原風景

金属精錬の技術は、歴史を過去へさかのぼり手法が素朴になればなるほど自然条件との結びつきは強くなる。また、信仰との関わりは深くなる。出雲の古代社会は、大和と北九州を結ぶ文化交流の接点であった。日本へ大陸から朝鮮半島を経て渡来した鉄の伝播も、その十字路ともいわれる山陰地方に定着して製鉄地として発展するが、そこには日本海で交易を結ぶ海上の道があった。一方、日本海を南下する寒流と、対馬暖流とがまじわる自然条件は、海岸部から中国山地にかけてときどき大雨や豪雪が見舞うが、その反面、変化に富んだ湿潤な気候は、広大な山地一帯に鉄精錬に必要な木炭を大量に供給する松・楢・樅など、雑木の森林を旺盛に育成し繁茂させた。

照葉樹林で覆われた山陰の大地は、また、真砂小鉄（こがね）とよぶ和鋼生産に必要な優れた砂鉄の宝庫でもあった。たたら製鉄には昔から山砂鉄・川砂鉄・浜砂鉄の三種が用いられた。出雲のたたら師は、いつの頃からかこれを和鋼を精錬する「鉧（けら）押し」(3日押し法) という操業の過程で、赤目（あこめ）、真砂（まさ）と組成の異なる2種を使い分けて炉に装入する方法をとっている。還元の早い赤鉄鉱が主体とされる赤目は、本来は銑鉄をつくる「銑（ずく）押し」(4日押し法) に用いる砂鉄であった。赤目のなかでもより色彩が赤色なものを「紅葉」という。砂鉄の最も質の優れたものは山砂鉄とされているが、例えば、菅谷鑪のある吉田村では、栃山・鷹ノ巣・木ノ下・奥杉戸などで良質の赤目が採取できた。また、田井地区の寸丸・上山からは極上の真砂が産出され、菅谷鑪の和鋼はこれらの砂鉄を用いて精錬されたと云われている。

鉄は炉の土を喰って太るといわれる。奥出雲は、原料である砂鉄、燃料となる木炭、炉材としての真砂土など、いたるところに鉄生産の原材料を産出する大地が存在している。また、そこには生産性を高める神が地域住民と共存している。金屋子神は、播磨国宍粟郡岩鍋から白鷺に乗って飛来し、天空から鉄生産にふさわしい立地条件を奥出雲と見定めて出雲国能義奥西比田黒田の森の桂の木に降り立った。

島根県能義郡広瀬町西比田には、西日本の製鉄・鍛冶関係者たちが信仰する金屋子神の総拠点、金屋子神社本社がある。現在、中国地方にはこの本社のほかに、金屋子神社という名称をもつ神社だけでも二十数社あり、それに地方のたたら山内（さんない）や鍛冶場などに祀られている小祠までを含めると、その数は200に達する。金屋子神が常住している風土は、地域によって多少異なっている。播磨国岩鍋（兵庫県宍粟郡千種町岩野辺）の金屋子神は、山中にある渓流の大きな岩石の上に小祠が設置され、渓流を挟んで2本の桂の巨木が聳えている。(次頁図2) 島根県広瀬町奥比田茅原地区にある金屋子神の小祠は、砂鉄採取後水田にしたいわゆる小糠地形の土手下にある。新しく造り変えられた祠の脇には山桜の老木が残され、その桜の樹齢が歴史の古さを漂わせている。島根県簸川郡佐田町波多川流域の稲田に祀られている金屋子神は、鋳造された鉄の20センチほどの女神像が祀られている。(次頁図3) 田のあぜ道を遮るように立つ石の小祠の周囲には、田の改良のため鉄滓が集められその幾つかが像の前に供えられている。たたら鉄生産の職能集団は、西欧からの近代製鉄法の輸入とともに廃業に迫られ、炭焼きや農夫に転業した。金屋子神もここではいまは農神に変身している。

農耕する現代人たちにとっては、田のなかの金屋子神は無意味な存在かも知れない。しかしそうかといって取り去ることはできない。それどころか、年に何回かの季節の祭りには、田の神同様に徳利に神酒を入れて祝っている。かつて日本の鉄産業を精神面から支えた金屋子神の原風景は、鉄生産にたずさわった祖先たちの遺伝子を受け継ぐ地域の人びとによって守られている。金屋子神が常住する環境は、鉄生産としての立地条件に加え、山岳・谷川・岩・神の依り代としての、桂をはじめとする樹木が必要であった。

3 鉄山社会を支えた技術の神々の世界

島根県出雲地方の山間部には、明治時代中頃までたたら製鉄を営んでいた鉄師の旧家がいまも残されている。西暦1900年頃まで日本各地でみられた製鉄集団の社会は、生産・流通の両面を支配する経営者を中心に、職能分担で構成されていた。島根県吉田村菅谷鑪山内（さんない）のなかには、事務系、技術系、原材料供給系の仕事を担う人びとが共同して村をつくっており、中世から近世にかけての鉄山社会の組織を伝えている。

江戸時代に鉄生産の実態を藩の領主に伝えるために描いたという広島県可部町加計の『隅屋絵巻』は、鉄生産をおこなう近世山内の様相をいきいきと伝えている。「たたら」とは、古くは鑪・鈩・高殿とも書いた。「たたら」とは、鉄を溶かす土の炉と、炉に風を送るための鞴・蹈鞴（ふいご・たたら）の装置を備えた施設全体を意味している。

図2　製鉄・鍛冶神　金屋子神小祠（兵庫県宍粟郡千種町岩野辺）

図3　島根県佐田町 波多川流域の金屋子神女神像

図5　東北地方の鍛冶神三宝荒神掛図（岩手県立博物館蔵）

図6　鍛冶神掛図（青森県八戸市櫛引八幡宮蔵）

たたら製鉄にさまざまな神が分担して関与したことは先にも述べた。『金屋子縁起抄』は、金屋子神は、金山彦・金山姫を両親とする子神だと言っている。また、『鉄山必要記事』の「金屋子神祭文」では、金屋子神を、金山彦・天目一箇神（あめのまひとつのかみ）と同一神としている。また、金屋子神祭文には、金屋子神のほか多くの神々の名が記されている。高殿は、天降った七十五柱の童神（わらわかみ）が七十五品の道具をもって土を動かし建設した。木を伐り杉の正（まさ）で鞴（たたら・ふいご）を造った。高殿の四本の押立柱の東方は、句句廼馳命（くくのちのみこと）という草木をつかさどる神が守り、南方は、金山彦命自らが守護した。二本の宇立柱には、日神・月神を迎え、火宇内板二十八門（ほうちいたふたそまりやつのと）は、二十八宿の星の神を像どって屋根を守っている。登り梯子は三十六鬼にたとえ、七十五本の長尾は七十五神にならっている。金（鉄）は垣山姫命、ほど（炉の風通し穴）は天津児屋根命、木呂（きろ・炉への送風管、竹を用い先端に口金がついている）は大山祇命、鞴と風は級長津彦（しなつひこ）・級長戸辺命（しなとべのみこと）が管理をつかさどった。番子は八十万神が、「うなり」は姫踏鞴五十鈴姫命を守護とした。このほか施設の周辺には、面足命（おもたるのみこと）、小彦名命（すくなひこなのみこと）、水神、雷神など、鉄づくりと密接に関わる神々が集団をなして存在し、祭文が示す「長田兵部は　長床をととのえ炭と粉鉄（こがね）とを集め　天に向かいて吹かせたまへば現鉄（あらがね）の湧くこと限りなく…」という状態を、職能集団の個々の技術の神として支えてきた。出雲地方をはじめ日本列島全域を覆っているかつての鉄生産地には、このように数多くの多彩な技術の神々の足跡が残されており、金属民俗学の精神面からの解明を促している。

4 製鉄・鍛冶神としての「目一つの神と目一つの鬼」

金屋子神の飛来で奥出雲と深い関わりをもつ播磨地方（兵庫西南部と岡山県東部周辺）には、『播磨国風土記』（713年）に「鹿を放ちし山を鹿庭山と号く。山の四面に十二の谷あり。皆、鉄を生す。」とみられるように、鉄生産の遺構や、製鉄・鍛冶神話を伝える神社が奥出雲に匹敵して数多くみられる。

兵庫県多可郡加美町的場荒田神社には、次のような神話が伝えられている。「此処に住む女神の道主日女命（みちぬしひめのみこと）は、父なし児を生んだ。道主日女命は酒を造り、父神を神意によって判じようと、田七町に稲を植えたところ、七日七夜のうちに稲が稔った。道主日女命は、もろもろの神を集めて祭りをおこない、子神にその造った酒を捧げさせたところ、はじめに天目一命に向かって捧げた。そこで父神が天目一命であることがわかった。」という。

加古川支流の杉原川流域には、上流の青玉神社、安楽田・荒田神社、中町・加都良神社など、天目一箇神を祭神としており、それらの神社すべてが砂鉄採取の谷間や製鉄遺跡の風土のなかにあって、製鉄・鍛冶神として、また、農神・水神として存在している。

作用川水系の作用郡作用町豊福地区には、滝田明神という小さい神社が山上に祀られている。地元の人はこの神社を蛇明神ともよび、いまでもそこには美しい蛇が住んでいると云っている。

1994年5月、映像記録のためこの地を訪れた。鳥居の奥の小高い山の中腹に、鍛冶屋屋敷という地名のわずかな平地がある。昔はそこで、どこからやって来たのか判からない人たちが、明神を祀り製鉄をおこなっていた。神社の前の谷川には、「濁り淵」という流れの深みがある。神が水浴びをするのでいつも水が濁っている。旱魃のとき、その淵に堰をつくって田畑に水を引くと二日後には必ず雨が降ると伝えている。異様な気配を感じて鳥居の脇をみると、1メートルを越える太い黒蛇が春の日差しを浴びて、地主のように横たわっていた。

片目の魚が川に棲んでいるという伝説は、民俗学者柳田国男が何例か採集して報告しているが、播磨の千種川、作用川水系にもその伝説があった。

兵庫県作用郡作用町長尾の神場（かんば）神社は、近くの民家で所在を聞いても判からぬような小さな社であるが、祭神として天目一箇神を祀っている。いつの時代かたたらの工人たちは、谷川が流れる山裾を僅か平地にしそこに小祠を建てた。この地域の片目の魚生息の伝説は、この神場神社脇の小さな滝壺から発生している。周囲の山や田畑には至るところ鉄滓が散乱しており、付近一帯が、千種鋼有数の生産地であったことを産業遺構として伝えている。

金属民俗学者谷川健一は、地名・伝承・氏族・神社の組み合わせから古代鍛冶氏族の役割と足どりを詳細に追跡した。近畿、山陽道山間部、九州各地の天目一箇神については、その著『青銅の神の足跡』第二章「目ひとつの神の衰落」に、2年間にわたって踏査した成果が詳しく述べられている。

『出雲国風土記』阿用郷（あようのさと）の条には「昔、或る人、此の処の山田を佃りて守りき。爾の時、目一つの鬼来たりて、佃人の男を食へり。爾の時、男の父母、竹原の中に隠れて居りき。時に竹の葉動（あよ）げり。爾の時、食はえし男、動々（あよあよ）と云ひき。」とある。この地は、現在の大原郡大東町東阿用とされ、八岐大蛇神話の舞台となっている斐伊川流域の山間にある。阿用は、出雲・松江方面から鉄生産が盛んにおこなわれた奥出雲への入り口に位置し、この辺から中国山脈へと標高が高まるにつれて「たたら」跡の数も多くなってくる。目一つの鬼が出現したと伝えられる竹薮の中には、鉄生産を証明する注連縄で飾られた金屋子神の石碑もみられ、『出雲国風土記』

図4 「一つ目の鬼」伝説の地にある金屋子神の石碑

の鉄と目一つの鬼の世界を彷彿させる。(図4)

目一つの鬼と製鉄・鍛冶神との結びつきは、岡山県吉備津神社鳴釜神事の故事がより具体的に裏付けている。祭神吉備津彦命は、昔、阿曾郷の鬼ノ城に棲んでいた鬼・温羅(うら)の左の眼を射抜いて退治した。首をはねた血潮は血水川となって足守川に注ぎ、備前首村に晒された。首は、はねられたにも拘らず何年もうなり続けた。その後、目一つの鬼温羅の首は、吉備津神社で吉凶を占う鳴釜神事の竈の下に埋められた。

総社市阿曾は、吉備津神社から西北約8キロのところにある。旧賀陽郡阿曾村にあって近世まで金屋と称する鋳物師が集団で住みつき、鳴釜神事の釜は、代々阿曾金屋の手で鋳替えることを習わしとしてきた。また、鳴釜神事には、いまでも阿曾の女性が「うねめ」として奉仕することをしきたりとしている。昔から阿曾の女性には温羅の怨霊を鎮める能力があると信じられており、鬼と鋳物師集団の特殊な関係を民間伝承のなかに伝えている。

製鉄・鍛冶集団が信仰する「目一つの神・目一つの鬼」の足跡は、岩手県遠野市周辺にもみられる。東北地方では、旧暦11月8日の「ふいご祭り」や正月には、床の間に三宝荒神の鍛冶神図を掛け、「鍛冶神の年取り」といって、掛図の前に清めた道具や蜜柑などを供える。岩手県立博物館が所蔵する3幅1対の鍛冶神図は、この地方きっての秀作であってもとは三陸沿岸に住む鍛冶が江戸時代から所有していた。(37頁図5)

左右の2幅には9面の鬼神が、また、中央の正幅には三宝荒神が主体として描かれ、いずれも鬼が吹く鞴の上に立っている。特に左幅の鬼神は、鍛冶道具の大槌と鉗(はし)を手にしており、古代ギリシャの壺に描かれた鍛冶の神ヘファイストスを思い起こさせる。中央正幅の前景には、刀剣を鍛える鍛冶と鬼、その横には、向こう槌を交替する3匹の鬼が出番を待っている。

青森県八戸市櫛引八幡宮所蔵の鍛冶神図は、珍しい図柄で構成されている。(37頁図6) 刀を打つ鍛冶と鬼と三宝荒神の間に、注連縄を張った青柴垣が描かれ、そこでは赤い腰巻きに上半身裸の女性が、刀剣を振りかざす鬼と矢を射ようとする鬼に追われている。中国では、優れた刀剣をつくるために、神への生牲として、精錬の際炉内に妻女の髪や身体を投入したという恐ろしい伝説がある。日本では、金属精錬や鍛冶の工房では女性の赤不浄を極度に嫌う習慣があった。一方、鍛冶の女房は医療を施す霊力をそなえていたり、鍛冶の老婆が怨霊と化して空を飛び人間に害を与えた、などとさまざまな説話を残している。この櫛引八幡宮の鍛冶神図の鬼に追われる女性が、具体的に何を意味しているか明らかでないが、昔の製鉄・鍛冶の社会では、生産性に対して独特な霊力をもつ女性や鬼は、特殊な民俗のなかで特別な扱いを受けて生きていた。

岩手県上閉郡大槌町一ノ渡には、鍛冶神・小槌明神が、樹齢500年の樅の神木が繁る古色蒼然たる景観のなかに祀られている。大槌川とその支流小槌川流域からは、奈良時代末期から平安時代初期と推定される製鉄・鍛冶遺跡が数カ所発見されており、古代からこの地域に鉄文化が成立していたことを物語っている。小槌明神は、大同年間(806～10) に土地の開拓者を山岳地にある明神平に祀ったのを縁起とするが、その後何回か他の地に遷宮されている。いまの一ノ渡に移されたのは、江戸期の寛永年間(1624～28) とされているが、神体となった開拓者芳形某は、鉄山を求めて山を移動した製鉄技術をもった民族の長であったかも知れない。また、その後の神社の社地の変遷は、資源を新たに求めた集団の移動を示すものかも知れない。

小槌明神は蛇体だとされている。いまとなっては神体が一つ目であったかどうかは判からないが、小槌明神から大槌川沿ぞいに1キロほど下った蔵打直には、千年杉2本の巨木の奥に、盲(めくら)明神と村人がよぶ小さな神社がある。神前には鉄滓が供えてあり、この神が製鉄・鍛冶神であることに間違いはない。近くの田畑のなかには、竜神や雷神の小祠もある。大槌・小槌川流域一帯は、古代の鍛冶・農神神話伝説で覆われている。

5 「雨乞いの神と製鉄の神」、もう一つの自然のなかの鍛冶神の足跡

出雲山岳地帯の谷川を遥か遡ると、樹齢数百年を越える桂の巨木が天空にそびえる景観に遭遇する。桂は、鍛冶神降臨を象徴する聖なる木である。また、近くには、水神を鎮魂する椿の古木が、製鉄をおこなったたたら跡と思われる窪地に生い茂っている。これらの樹木が生息する地は、神を迎えるための神坐(かみくら)であって、しばしば神の依り代となった榊は、もとは、榊・樒などとともに椿もふくむ総称であった。たたら師や鍛冶は火を扱うだけに水神に対する信仰は厚く、たたらの施設や鍛冶の工房近くには、桂とともに椿を植えた。

製鉄・鍛冶神と蛇との関係は、作用町の滝田明神でも大槌町の小槌明神でも触れた。蛇は云うまでもなく水神・雷神・農神と深く結びついている。

谷川健一『青銅の神の足跡』(1979· 集英社)、若尾五雄『黄

金と百足』(1994· 人文書院) 前登志夫『吉野紀行』(1984· 角川選書) は、この論をすすめるにあたって、多くの知識と示唆を与えてくれた。筆者は、大和に住む詩人、前氏の『吉野紀行』を手に、奈良から吉野にかけての鉄の歴史の道を歩いた。

大和三山の天香具山は、三山のうちでもずばぬけて神霊のこもる山とされた。神武天皇は、大和国家建設のため、天香具山の埴土をとってきて祭器を焼き、丹生川上にのぼって天地の神々を祝祭せよと云う。いまでは「丹生」という地名は、水銀を生産した地域として知られるが、この地方での丹生は、古代の鉄生産とも密接に関わっていた。

丹生川上中社は、高見川の上流で支流が出会う深淵にあって、美しい水の女神ミズハノメの神を祭神としている。ミズハノメは、火の神の誕生によって、陰部（ほと）を焼かれた母神イザナミが、その苦痛に悩まされまさに亡（か）くれんとするとき、水の神として生誕する。ミズハノメは、激しい落雷や稲光りの後に降る雷雨に象徴され、生命にとってもっとも重要な水源をつかさどった。

飛鳥川上坐宇須多岐比命（アスカカワカミニマスウスタキヒメ）神社には、天文22年（1553）の銘をもつ鉄製の釜がある。祭神ウスタキヒメのウスタキは、臼滝であって雷雨の神とされている。飛鳥・島の庄から、妹（いも）峠の山道を飛鳥川に沿って遡ると加夜為留美（かやなるみ）神社がある。『大和志』ではこの神社を「今称葛神（いまやくずしん）」としている。葛神は、九頭神すなわち雷神を管理する竜神のことである。妹峠を地元の人はイボ峠・疱瘡峠ともよんでいる。昔の人にとって天然痘は恐るべき病気で、この地方では、その疫病の侵入を防ぐために、村境や峠に疱瘡神を疫神として祀った。イボ峠疱瘡峠の呼び名は、この峠に疱瘡神の小祠があったことに由来している。(図7)

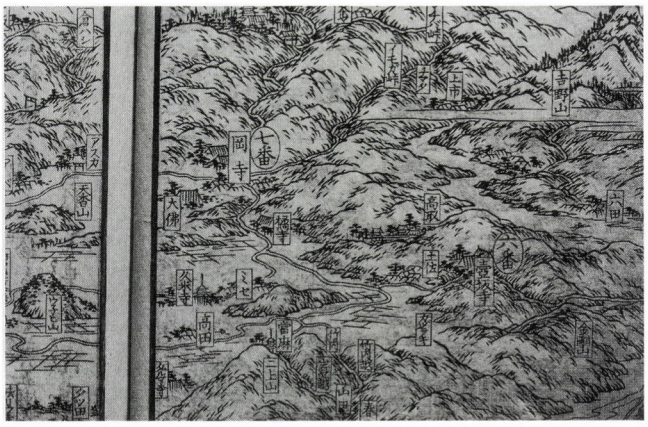

図7　飛鳥から吉野に通じるイモ峠　西国三十三所名所図会

疱瘡神・イボ神は、古代製鉄集団の「たたら神」でもあったとされている。妹峠は、砂鉄運搬する主要な道であったことから砂鉄峠とも云われた。古代の生産を象徴する聖なる妹山と呼応している。たたら跡には、芋にまつわる伝説が多い。民俗学者柳田国男が金属精錬の古代を説話の分布から立証した「炭焼小五郎長者」の伝説は、石川県・和歌山県・岐阜県・静岡県・岩手県などでは「イモ掘り長者」の伝説に置き換えられている。無欲な男が山で芋を掘り、芋を谷川で洗っているとき砂金（砂鉄）を見つける。そして、精錬した金を都に売ることで長者になったという話である。日本では鋳物師を、古くは「いもじ」といった。妹・芋が生産性を高めるものとして、採鉱や冶金に深く関わっていたことを意味している。

東北地方の三陸沿岸部では、餅鉄というマグマによって半溶融された鉄が大地から採取される。これを芋というかどうかは明らかでないが、形態は山芋に似ている。たたらで生産された鉄は、こぶし大の鉄塊に子割され、質によって分類される。この鉄を形態上の類似から芋と呼ぶ。(図8) また、イボとは、海綿状の質感が天然痘の症状と類似していることから云われたのかも知れない。播磨の揖保（いぼ）川上流の中山間地は、鉄の名産地であった。

図8　玉鋼（芋とも呼ばれていた）　安来市　和鋼博物館

奈良県御所市近くに、占いの神として知られる一言主神（ひとことぬしのかみ）を祀った葛城明神がある。一言主神は、みにくい顔をしているので、昼は働かなかった。イボ神・鍛冶神を連想させる。鍛冶神が、醜い顔をしていたり、目が不自由であったり、耳が聴こえなかったり、脚に障害があったという神話の系譜は、ヨーロッパからアジアにかけて広く分布している。

アフリカ大陸中部に伝えられる鍛冶神・オグンは、両刃の斧を頭部につけた厳めしい神であるが、民衆に製鉄・鍛冶の技術を伝授した後は、民に乞われ農神に変身している。日本では、農神は農閑期には山神に変身する。山神は山に入るとその間、狩猟の神にもなる。製鉄・鍛冶神は、農神・水神から金属神への転身なのか、また、それは金属神からから農神・水神への逆転なのか、あるいは常に両義性的存在なのか、今後の詳細な検討を必要としている。

参考文献　「鉄山必要用記事」補註　飯田賢一，田渕実夫（『日本庶民生活史料集成第十巻』）

（1996年4月7日受付）